

テナントムワン＝クイキニャーク＝大ワタリガラス？  
 —コリャク神話研究の再検討(1) Tenanto'mwan の説話(I-a)—

荻原眞子

はじめに

コリャクはカムチャトカ半島の北半から北東シベリアに居住する原住民で、コリャク自治区の構成民族である。その人口はソ連時代 1989 年の統計では全体で 8,900 人、そのうちコリャク語の話者は 5,000 人余とみられ、その大部分はコリャク自治管区に居住する。21 世紀の今日ではその生活にかつてのように古典的な民族学的な特徴を強調することは、シベリアの他の地域の原住民の場合と同様に、的外れなことである。しかしながら、こと口承文芸に関していえば、19 世紀末～20 世紀初頭に採録されたような説話を今なお聴くことができるということも事実として伝えられている。

一方、北方の、特に、ユーラシアの東端地域における口承文芸をマクロな視点から考察しようとするなら、北東シベリアは当然のことながら視野に入れなければならない。地理的にはカムチャトカ半島と北東シベリアはオホーツク海を囲んで日本列島の北方、アムール・サハリン地域と一衣帯水であり、また、ベーリング海を介してアラスカ、北米大陸につらなる。ユーラシアとアメリカ大陸にまたがるこの北太平洋沿岸地域は古くより考古学、民族学、言語学などの領域から格別に注視され関心がもたれてきた。そのもっとも顕著で重要な試みは 20 世紀初頭に F.ボアズの主導のもとでアメリカ自然史博物館が実施した壮大な研究調査である。これは「ジェサップ北太平洋調査」としてつとに知られているが、ユーラシアと北米のカナダ、北西海岸地域の原住民文化の言語および民族学の総合的な調査であり、究極的な目的は両地域の文化的、民族的な関連を探り出そうということにあった。ユーラシア側ではチュコト半島、カムチャトカ半島および北極海沿岸地域のチュクチ、コリャク、イテリメン、ユカギルが調査対象となり、極東ではサハリンやアムール川流域のゴリド（ナーナイ）の調査が行われ、その成果が浩瀚なモノグラフとして刊行された<sup>1)</sup>。それらは、各民族についてのもっとも基本的な文献として今日も貴重である。

ジェサップ北太平洋調査でコリャクの調査に携わったのはワリデマール（ウラジーミル）・ヨヘルソンである。1900 年の冬から 1901 年の夏にかけて、ヨヘルソンは夫人と共にカムチャトカ半島の中部を中心に西のタイゴノス半島、ペンジノ湾地域、東のベーリング海沿岸地域で民族学的な調査を行い、言語や物質文化の資料を収集している。時間的な制約のためにカムチャトカ半島の北部と太平洋岸のコリャクの調査は断念したという [Jochelson 1908:1]。この調査の成果が労作『コリャク

族』(1908)であるが、その前半部に神話・伝承のテキストが130篇収められている。

コリャクの神話・伝承については、このテキストがもっともまとまった資料であり、その後の研究の主要な典拠となっている。その後には、S.スチェブニツキー、I.ヴドーヴィン、N.ボグダーノフ、A.ジューコヴァなどが採録を行っているが、S.スチェブニツキーの採録は公刊されておらず、その他はそれほど多くの話数ではない。ヨヘルソンも含め、その後採録されたテキスト資料はチュクチ、イテリメン、エスキモーの資料とともにGメノーフシコフ [1975] に収録されている。

### 1. コリャクの神話・伝承について

ヨヘルソンのテキスト130篇はつぎの6つの地域で採録されている。すなわち、1) タイゴノス半島(トナカイコリャク)(Topolvka川, Kilimadja川, Chaibuga川, Avekovka川のキャンプ地)、2) ペンシナ湾西岸(海岸コリャク)(Big Itaka村, Paren村, Kuel村, Mikino村)、3) パルパル山脈のキャンプ地、4) 上ペンシナ湾岸の海岸コリャク(Kamenskoye/Va'ikenan/村, Talovka村)、5) ペンシナ湾東岸(海岸コリャク)(Pallan村, Vayampolka村)、6) ベーリング海沿岸(Ki"chigi/Ki"chin/村, Tillechiki/Ti'lliran/村, Khayilin/Qa'yilin/村, Pakha'cha/Poqa'c/村, Opuka村)。『コリャク族』にはこのほかに、カムチャダルのテキスト9篇が収められているが、その採集地はTighi'l, U'tkoloka, Ka'vran, Seda'nka各村である。

口承文芸のジャンルについて、ヨヘルソンはコリャクがどのような分類をしているのかを示してはいない。一方、1920年代後半から1930年代前半に採録に当たったS.N.スチェブニツキーは、コリャクの口承文芸にa)神話的伝承、b)歴史的伝承、c)昔話を区分し、a)の神話的伝承がもっとも豊富で多様性に富むが、全体としてそれらが「創造主・ワタリガラス」の神話サイクルに収斂されることを指摘している。そして、b)は戦争についての伝承であり、トナカイ牧民(チャウチュヴェン)の伝承では敵対者はチュクチ、北東の定住コリャク(アプキンやアリュートル)の伝承では戦闘の相手はチュクチと並んで、トナカイコリャクである。c)の昔話は少なく、主として、トナカイを所有する牧民とかれらに雇われる小作人の話であるという[Стебницкий 1941:106-107 /Меновщиков 1974:12-13]。しかしながら、このような特徴による分類がそのままヨヘルソンの採録した130話について当てはまるであろうかといえ、その見通しは立てにくい。また、1970年代半ばに当時のコリャク民族管区で調査をしたE.M.メレチンスキーは、ヨヘルソンの見解をうけ、コリャクとイテリメンの口承文芸が極めて近似しているとして、「コリャク・イテリメンのフォークロア」という語を用いて議論を展開しているが、そのなかで、コリャクでは「すべての説話が *лымный* (ルイムヌイル) という *сказка* (スカースカ) のカテゴリーでカバーされ」、そして、このスカースカは「同

時に神話でもある」と述べている[Мелетинский 1979: 36-37]。このロシア語のスカスカには通常、日本語の「昔話」が当てられている。ジャンルに関する議論がその後の研究でどこまで進展しているのかは、実のところ、分からないが、少なくとも、管見では明確化されているようには見えない。

2)

コリャクの口承文芸で、そして、チュクチやイテリメンについても同様であるが、もっとも典型的な特徴として挙げられてきたのはいわゆる「ワタリガラス神話のサイクル」(cycle of raven myths; цикл ворона)である。つまり、これらの諸民族の神話・伝承が「大ワタリガラス=クイキニャーク」の説話に収斂されるとして、北米のインディアンの神話との共通性が強く説かれてきた[Jochelson 1908:17-24; 354-355; Мелетинский 1979; Chowning 1962; Charrin 1983]。ところで、創世神話についての予備的な考察の試みでは、そこに「ワタリガラス」の影は必ずしも顕著ではなく、そのことからコリャクだけでなく、チュクチ、イテリメンを含めて北東シベリアの口承文芸にはいくつか異なる神話層の可能性が予測された[荻原 1990]。しかしながら、いく人かの研究者が同じことに気づきながら[Мелетинский 1979; Chowning 1962]、なお、「ワタリガラス神話のサイクル」に拘泥し、矛盾を抱えたままテキストの構造分析やベーリング海域の文化的関連性の論拠としてきたのはなぜであろうか。理由のひとつとして、議論の根元にかかわる基礎資料の再検討、テキストクリティークが疎かにされたままで方法論的な議論が先行したのではないかと推測される。

結論からいえば、ヨヘルソンのコリャク語テキストの英訳にその原因があり、それは言葉を変えれば、ヨヘルソンの解釈に誤った思い込みが介在していたことにあると思われる。つまり、コリャク語のテキストにおけるテナントムワン、クイキニャーク、大ワタリガラスを同一の存在とみなし、ヨヘルソンは前二者をそれぞれ大ワタリガラスと置換してしまったのである。かくして、コリャクの神話テキストでは、つねに大ワタリガラスが登場することになり、それが創造神、文化英雄、始祖神から道化、愚者、滑稽者というトリックスター的存在までの幅広いレパートリーの演者と相成ったといえよう。

この予測を検証するには、ヨヘルソンの採録した音声資料を直接対象にしなければならないが、今、それを入手することも、そして、仮にそれが入手できたとして、翻訳テキストとの照合をすることはにわかには不可能である。したがって、ここで次善の策としてできることは、ヨヘルソンのテキストを慎重に検討してみることであろうと考える。

## 2. 説話の主体と地域的な特徴

130 話のテキストを眺めて気づくことは、コリャクの説話には3つの異なる語り口があることであ

る。すなわち、

I. “It was at the time when Creator(Tenanto'mwan) / Big-Raven (Quikinna'qu) lived.”

II. “Creator (Tenanto'mwan) / Big-Raven (Quikinna'qu) + 動詞”

III その他

の 3 タイプである。(以下では、ヨヘルソンの解釈の再検討を目的とするため、Creator, Big-Ravenではなく、括弧内の原語 Tenan'tomwan、Quikinna'qu、もしくはテナントムワン、クイキニャークを用いることとする。カタカナ表記は近似音であり、ラテン文字表記は便宜的である。<sup>3)</sup>)

I は「テナントムワンがいた頃のこと」、もしくは「クイキニャークがいた頃のこと」という語り口で、出来事が原初ないしは神話的な時代に生じたことを明かにしている。これに加えて、テナントムワンでもなく、クイキニャークでもない主体が登場する場合もある。この3つのサブタイプを次のように整理しておく。

I-a) “It was at the time when Creator(Tenanto'mwan) lived.”

I-b) “It was at the time when Big-Raven (Quikinna'qu) lived.”

I-c) “It was at the time when Big-Grandfather(Acicena'qu); Eme'mqut lived” など。

IIはテナントムワンもしくはクイキニャークがどのように暮らしていたか、誰といつしよであったか、なにをしていたかなどという一文ではじまる。この語り口は、テナントムワンの場合とクイキニャークの場合とで、語りの文言には差違がないように見える。したがって、このタイプについてもテナントムワンが主体の場合を a)、クイキニャークの場合を b)として分けることができる。次にその例をいくつか掲げる。

II-a) Tenanto'mwan + 動詞

Tenanto'mwan lived in affluence(No.3,31). Tenanto'mwan and his family lived by themselves(No.7).

Tenanto'mwan was ,, (No.17, 35). Tenanto'mwan went sealing (No.23). Tenanto'mwan possessed three herds of reindeer(No.26).Once Tenanto'mwan said to ,, (No.33, 37). Tenanto'mwan sent his reindeer-herd into,,(No.34).

II -b) Quikinna'qu + 動詞

Quikinna'qu and his son Eme'mqut lived by themselves(No.6). Quikinna'qu lived alone with ,, (No.66, 84,85,88,93,94,). Once Quikinna'qu said to his wife(No.69,70,73,126,127). Quikinna'qu went sliding down a slope(No.78). Quikinna'qu and Miti quarrelled(No.118).

II -c) その他の主体 + 動詞

III. は、語り口が I.でも II.でもない場合である。しばしば、動物が主体となる例があり、動物昔話

のような体をなしている。いくつか例を示す。

Yineaneut and Canainaut lived alone,,,(No.1) Kilu was a shaman(No.14). Goose-Man lived with his family(No.27). There once lived a man named Ermine-Man(No.49). Ptarumigan-Man was caught in a noose(No.55). Gull-Man once said to ,,,(No.67). Dog-Man said,,,(No.68). Once upon a time there was a Hare and a Fox(No.90). Root-Man had a daughter,,,(No.91).

語り口が I.のタイプでは「a) テナントムワン、もしくは、b) クイキニャークが生きていたころのこと」というように時間的な設定がなされており、a) は 130 話中 11 話、b) は 27 話ある。II.のタイプは a) テナントムワン、もしくは、b) クイキニャークが存在していただけでなく、「どのように暮らしていたのか」、「何をしたのか」、「どうしたのか」というような叙述ではじまる。すなわち、II.のタイプは、話の時間的な設定ではなく、テナントムワン、クイキニャークの何か具体的な所業や状態から話のはじまる。テナントムワンおよびクイキニャークに注目してみると、130 話中には I.タイプと II.タイプの説話が相当部分を占めているが、その他にも、この I. および II.のタイプにはテナントムワン、クイキニャークの他に c) Self-created(Tomvo'get), Big-Grand-father(Acicena'qu), Eme'mqut, Ermine-Woman, Ermine-Man が少数ながらある。

このような I.II.のタイプを除くと、III.の語り口の説話では登場する主体は、Eme'mqut の兄弟たち、カラという人喰いの悪霊のほか、動物や自然現象などであり、それらにはいずれも人格的な特性が付加されている。上に挙げた例のほかに、たとえば、「カモ男」、「ハツカネズミのこどもたち」、「カジカ男とサケ男」などの生き物、「小さな護符男」など人工物、「霧男」など自然現象など多彩である。これらは原語を検討してみなければならないが、例えば、「カモ男」は「雄カモ」ではなく、「カモ・ヒトの男」であり、あたかも人格的な存在として登場する。こうした、自然の存在観はコリヤクの口承文芸の一つの大きな特徴であるかに見え、このこともきわめて興味深い点である。

これまでに述べた語り口のタイプは以下のように簡略化することができる。

【語り口のタイプ】:

I-a) "It was at the time when Tenan'tomwan lived."

I-b) "It was at the time when Quikinna'qu lived."

I-c) "It was at the time when Achichenaqu; Eme'mqut lived."など。

II-a) テナントムワン + 動詞

II-b) クイキニャーク + 動詞

II-c) アチチェナーク、エメムクットその他 + 動詞

III その他

さて、以上に述べたことは、コリャクの説話の全体についての特徴であるが、これを地域別に検討してみると、また、異なった特質が浮かび上がってくる。130話のテキストは先述のように6地域で採集されており、採話数には甚だしい多寡がある。反復の煩わしさを厭わず、ここにその6地域における採話数を示しておこう。

【地域と採話数】

- 1) タイゴノス半島のトナカイコリャク -45話
- 2) ペンシナ湾西岸の海岸コリャク -22話
- 3) パルパル山脈のキャンプ地 -4話
- 4) 上ペンシナ湾岸の海岸コリャク -43話
- 5) ペンシナ湾東岸の海岸コリャク -3話
- 6) ベーリング海沿岸 -13話

このうち、おおまかに云えば、1)と3)はトナカイコリャク、2)、4)、5)、6)は海岸コリャクと見られる。各地域の説話について、その語り口のタイプ別に話数を示すと次のようである。

語り口/地域	1)	2)	3)	4)	5)	6)
I-a)	1	0	0	0	0	0
I-b)	2	1	0	12	1	2
I-c)	1	4	0	2	0	0
II-a)	15	0	0	0	0	0
II-b)	1	1	2	9	2	5
II-c)	0	3	0	0	0	0
III	15	13	2	20	0	6
計 (話数)	45	22	4	43	3	13

ここには地域的な特徴が歴然と顕れている。まず、テナントムワンが顕著な地域は第1のタイゴノス半島のトナカイコリャクにおいてである。45話中の26話がテナントムワンであり、クイキニャークが語り口に登場するのは3話のみである。トナカイコリャクと思われる第3地域の4話にはテナントムワンの例がないが、採話数が少ないために断定的なことは云えない。次に、クイキニャ

ークが顕著な地域は第4、5、6地域、いずれも海岸コリャクであり、ここではテナントムワンが登場しない。もう一つ指摘しておかなければならないのは、第2のペンシナ湾西岸の海岸コリャクにおいては、テナントムワンでもクイキニャークでもなく、アチチェナークが主体となっていることである。I-c)の4話中2話はアチチェナーク、もう2話はエメモクットであり、II-c)の3話はアチチェナークである。

以上のように、説話の語り口に注目してみると、主要な登場主体にはテナントムワン、クイキニャーク、アチチェナークの3者があり、その分布には明かに地域的な偏りがある。資料として採話数や採話の過程にいろいろな問題があることは当然なことで、そのため、拙速な結論は控えなければならないが、少なくとも、暫定的な見通しをもつことは許されよう。すなわち、第1には、テナントムワン、クイキニャーク、アチチェナークの3者が地域的な違いとしてあるらしく、同一の地域で同じ語り口タイプの説話はこの3者が混在することはあまりないと云えよう。第2には、このような比較検討を進めることによって、コリャクの地域的諸集団の生業的な特徴や、さらには、諸集団の起源的、系譜的な背景、あるいは社会・経済的な関係の考察に何らかの示唆が得られるであろうということである。今、そこに踏み込む余裕はないので、差し当たっては、テナントムワンの説話を取り上げてみることにする。というのは、ヨヘルソンが創造神と訳しているこのテナントムワンが説話のなかで具体的にどのような存在であり、役割を果たしているのかを明らかにしておくことは、他の主体を検討する際の比較考察にとって肝要であると思われるからである。また、テナントムワンの説話そのものが、口承文芸という観点から見て、どのような特質をもっているのかを把握しておくことも後の作業のためには重要であると考えられるからである。

### 3. テナントムワンの説話

語り口に2つの定型的なタイプがあることから、そのテキストの内容には何か相互に異なる特徴がありはしないであろうか。そのような観点から、まずは、I-a) “It was at the time when Tenantom'wan lived.” にはじまるテキストを取り上げてみよう。すでに触れたように、この種の説話は11話である。

#### I-a-1) テナントムワンの所業についての説話

病気の原因がカラウの仕業であることを察知して、これを確認すると、それを排除、病気から解放するというカラ退治の説話がある。

1. 「テナントムワンは如何にしてカラウ<sup>4)</sup>を退治したか。」 [No.13] (抄訳)

テナントムワンがいたときのこと。あるとき、息子たちが病気になった。テナントムワンは「どうやら、カラウが近くにいるようだ」と云って、みんなが寝たあと、外へでると、ワタリガラスのコートをはおって、カラウのキャンプへ飛んでいった。屋根の煙出しから中を窺うと、カラウが「明日テナントムワンの家を襲おう。奴と家族を皆殺しにしよう」と云っている。

それを聴くとテナントムワンは戻ってきて、ワタリガラスのコートを脱いで、人間の姿になった。翌日、カラウたちがやってくると、客として迎え、炉の上の垂木に座らせ、煙出しの穴を塞いで炉にマツの木をどンドン燃やして火あぶりにした。カラウは悲鳴をあげ、家から出してくれるようにと懇願した。テナントムワンがなおも燃やしつづけると、「石をくれたらそれに呪文をかけ、ここに隠れているカラウをいっしょにつれて出よう」と云った。テナントムワンの息子が石をとってくると、カラウはそれに呪文をかけ、それで見つけ出されたカラウをつれて出ていった。カラウがいなくなると、息子たちは元気になり、二度と病気になることはなかった。[話し手：Chaibuga 川のキャンプ、トナカイコリャクの女性 (名前は省略)、1901年]

カラウもしくはカラはコリャクの説話のなかでは多様な性格をもっており、しばしば悪霊、人喰いとして、また、災いや病気の原因として現れる。この説話では子供の病気 (なんの病気かは不明であるが) は家のなかに潜んでいるカラウが原因である。テナントムワンはそのカラウの一族を懲らしめ、同時にその力を借りて屋内に潜む眷属を暴き出す。呪文や特別な呪力をもつ石によってカラウが見つめられるというのは、あたかも磁石で鉄片を探り出すごとくであるが、このような石はコリャクだけに固有のものと言うわけではない。また、ここではテナントムワンがワタリガラスのコートを来て飛翔するが、それを脱ぐと人間の姿に戻るようであるから、テナントムワンは人格的である。

次の説話はやはりカラウが相手ではあるが、その食糧の蓄えを横取りして飢餓をしのぐという話である。

2. 「テナントムワンは如何にしてカラウを脅したか」 [No.22] (抄訳)

テナントムワンがいたころのことだ。彼の食糧が尽きて、家族が飢えかかった。テナントムワンは狩りに出かけ、海岸のカラウの村へやってきた。家のなかには干したサケがた



くさん吊してあった。テナントムワンはワタリガラスに変身して、その家へいくと「カア、カア、カア」と啼いた。カラウは仰天して「何という恐ろしい悪霊がやってきたのだろう」といって、家から逃げ出した。それからテナントムワンは家族とトナカイ橋でカラウの家に移ってきた。

怖れがおさまると、カラウの一番の年寄りが様子を見に戻ってきた。家のそばでテナントムワンに会い、「これはわたしの家で、あの納屋はわたしのものだ」といった。テナントムワンは「では、誰がこれを建てたのか訊いてみよう」ということにして、カラウとテナントムワンは交互に納屋にむかって「おまえを造ったのはわたしではないかね？」と訊ねた。納屋はカラウのときには何も答えないが、テナントムワンには「あなたです」と答えた。地下式の家や周囲のもの、家のなかの床や梁、炉、油ランプもみな造ったのは「あなたです」とテナントムワンに答えた。

カラウは泣き泣き帰っていった。妻のカラウ女に話すと、「いっしょにいこう」といって戻ってきた。そして、今度はカラウ女とミチとが屋根を葺いてある草や、納屋、家のなかのバケツややかん、袋や尿壺に問うが、すべてのものがカラウ女には答えず、ミチに「つくったのはあなたです」と答える。こうして、カラウは妻と子供のところへ去っていき、その家族は飢え死にしてしまった。

テナントムワンはカラウの家にとどまり、夏になって河口に魚がくると元の家にもどって漁をした[語り手：Topolovka 川のキャンプ、トナカイコリャクの女性、1901年]。

現在の語り手や聴き手の立場からみるなら、相手がなんであれ、テナントムワンが脅迫と詐欺まがいの手段を駆使して利をはかるといのは理解しがたく、また、納得しにくい。しかしながら、コリャクの神話・伝承ではこの種の話はまだ序の口で、テナントムワンばかりでなく、クイキニャークが主人公の説話でも普遍的な（と思われる）道徳や良識、理性は無惨にうち碎かれることがしばしばである。

ここでも、テナントムワンの一時的なワタリガラスへの変身が行われるが、この説話での特異な点は、本来カラウの所有物であるはずの納屋や家、屋内の器物などが、主人に背き、テナントムワンに有利な反応をすることである。それもまた、テナントムワンの超自然的な能力の為せる技ということであろうか。テナントムワンの超能力はいくつもの説話に認められるが、次の説話では、テナントムワンは吹雪を止める作業を行うと同時に、吹雪が起こる理由が説明されている。

### 3. 「風びと」 [No.40]

テナントムワンがいたころのこと。ある時激しい吹雪が起こり、絶え間なく吹き荒れたので、テナントムワンは風男の村へ出かけて、その理由を見つけようとした。彼は櫓の代わりに皮舟を出し、それをトナカイではなくハツカネズミに牽かせて出かけた。風びとの村へくると、村人たちがテナントムワンの櫓とトナカイ（ハツカネズミ）を笑って、「そんなトナカイでわれわれの贈り物をどうやって運べるのか」と訊いた。「舟に積んでくれ、運べるから心配しなくていい。」風びとは彼らもっている食糧や服を全部皮舟に山積みにした。テナントムワンはハツカネズミを御して、家へ帰り、また、戻ってきた。風びとたちは皮舟にまたしても持っているものをすっかり積みこみ、テナントムワンはそれを運び去った。テナントムワンのハツカネズミは風びとの櫓の紐と牽き綱を喰いちぎった。風びとはもはや移動することができなくなり、それで、吹雪は止んだ。[語り手：Topolovka 川のキャンプ、トナカイコリャクの女性、1901年]

吹雪は風びとのトナカイ櫓による移動によって起こる。テナントムワンは風びとの所有するものを全部奪い、その上、トナカイ櫓の紐や綱を切って、身動きできないようにし、こうして、吹雪を止めた。ネズミの櫓はコリャクの説話にしばしば登場し、後にみるようにそれが「鉄ネズミ」や「鉄櫓」の場合には英雄説話とみなしてよいような内容の話になる。

コリャクの死生観を示す説話の1つとして、カラとシャマンの登場する次の話は興味深い。(これは少し長いので、便宜的にいくつか区切って番号を付した。)

### 4. 「月女はいかにしてテナントムワンの息子を蘇らせたか」 [No.29] (抄訳)

①テナントムワンがいたころのこと。彼にはたくさんのトナカイと2人の息子のエメモクットと大ひかりがいた。大ひかりは強い闘士で、走者であり、あらゆる競技で勝っていた。この兄弟は野でトナカイの群と寝ていた。あるとき、エメモクットが朝起きると、大ひかりがいなくなっていた。彼は家へ帰り、父親にそのことを話した。

②エメモクットはあちらこちら、夜も眠らず探しつづけたが、弟はどこにもいなかった。あるとき、野宿している丘の上で月を眺めていた。そして、月に向かって、「上で何を考えているのか」と訊ねた。月は地上に下りてきて、エメモクットに「あなたは何を考えているのか」と問うた。「弟のことだ。どこにもいないのだ。」「もし、お礼をくれるなら、どこにいるか教えよう。」「何が欲しいか。」「結婚してくれるなら、教えよう」と月は答えた。「で

は、結婚しよう。弟がどこにいるか教えてくれるなら」とエメモクットは云った。「わたしを騙すでしょう」というので、エメモクットは彼女のズボンのなかに手をいれて陰部に触れ、「騙しはしない。これで結婚したも同然だ」と云った。そこで月はこう話した。「あなたの弟は海中の島に住んでいるカラウが殺し、皮膚を剥いで、それをトナカイの毛皮代わりに使っている。」

③エメモクットは家へ帰って、そのことを父親に話した。テナントムワンは「おまえを遣ったら、救いだすのに失敗するだろう。わたしがいこう」と応えた。テナントムワンは出立して、間もなく、カラの島にやってきて、カラたちをみんな眠らせ、地下式の家を下りて、息子の皮膚をもって出てきたが、そのとき鉄の樽のなかにカラウの娘がいるのを見つけ、その娘もつれて帰ってきた。

④家につくと、すぐに月女を呼びにやり、彼女がくると、テナントムワンは「息子を生き返らせてくれ」と云った。彼女は大ひかりの皮をもって外へでると、それを凍った川の氷に打ちつけた。はじめに、若者の指の爪が現れ、次に両手が、それから胴体が大きくなりはじめ、とうとう全き人間が再現した。月女は彼が自分の足で立てるようになるまで氷に打ちつづけた。そのあと、エメモクットは月女と結婚し、大ひかりはカラの娘と結婚した。

⑤あるとき、テナントムワンは「このまま何も手を打たずにおとなしくしていると、島のカラたちがきて、われわれはみな喰われてしまうだろう」と云って、出かけた。カラの地下式の家があり、そのそばにトナカイの群がいたが、それがテナントムワンに角を向けて突進してきた。テナントムワンが「来るな、おまえたちをみなわたしの家へつれて行ってやる」と云うと、トナカイは飛びかかるのを止めて、ついてきた。カラの家に入ると、寝室用の便器、皿やその他のものが襲いかかってきたが、「飛びかかるな、おまえたちをみんな持っていこう」というと、それらは留まった。テナントムワンはすべての物と地下式の家と、その住人のカラたちを引き連れていった。このカラたちは人喰いではなかった。

もう一方の、島のカラは目覚め、人間の皮がないので、「テナントムワンがきて、持っていったのだ。返してやればいい」と云ったが、年寄りのカラが娘がいないことに気づいた。

「娘を奪っていったとなれば、いって彼らをみんなやっつけよう」と云って、カラたちはテナントムワンの家へやってきた。ところが、カラたちが家に近づくとトナカイたちが襲い、地面の下から入ろうすると寝室用の便器や皿やその他の道具が襲いかかるので、退散した。

⑥カラウたちがいってしまうと、テナントムワンは大ひかりに「嫁をつれて両親のところ

へいってくるがよい」と云った。すると、嫁の善なるカラ女が「両親はわたしの夫を食べるだろう」と云った。テナントムワンは「心配ない。喰いはしまい」と云った。若い夫婦は出発し、カラの家に到着した。大ひかりが「娘を迎えに出てきてください」と大声で云うと、彼らは「娘はいない。テナントムワンが盗んでいった」と応えた。そこで善なるカラ女が姿を見せると、カラたちは出てきて彼女を迎えた。彼女が、「わたしの夫を食べてはいけない。テナントムワンがクジラの脂身、アザラシの脂身と肉を持たせてくれた。それを食べなさい」と告げると、「おまえの夫は喰わないでおこう」と応えた。

大ひかりと妻は一時カラたちと過ごし、テナントムワンのもとへ戻った。後に、彼はカラたちに来ていっしょに暮らすようにと伝言し、「クジラを獲るから、いっしょに食べよう」と云った。カラたちはテナントムワンのもとへやってきて、暮らした。テナントムワンはクジラを獲って、脂身をカラに食べさせたので、彼らは人喰いを止めた。おしまい [語り手：Topolovka 川のキャンプ、トナカイコリヤクの女性、1901年]。

この説話は大きく前段と後段に分けられ、全体として神話的な特徴が顕著である。テナントムワンの息子大ひかりは強い闘士・走者であるが、行方不明になる。その行方を月女が教えるが、情報提供の交換条件としてエメモットは結婚をする。テナントムワンは海中の島のカラのもとへいき、カラたちを眠らせ、大ひかりの皮膚を取り戻すが、そのときに鉄桶に入っていたカラの娘を奪ってくる。月女が大ひかりの皮膚を川氷に打ちつけて蘇生させ、エメモットは月女と結婚し、大ひかりはカラの娘と結婚する。ここまでの前段である。後段では、テナントムワンのカラ退治が語られるが、カラのトナカイや家財道具の反撃をテナントムワンが調伏すること、それらが本来の主である人喰いカラを撃退するというエピソードから成る。そして、大ひかり夫婦は嫁の両親を訪ねるのであるが、人喰いカラの本質を変えるためにテナントムワンは大量のクジラやアザラシを持たせる。かくして、人喰いカラとテナントムワンの家族とは互いに往き来するようになる。結婚した夫婦が嫁の両親を訪ねるとするのはコリヤクの説話での常套的な結末で、その際に相手方から未婚の若者を伴ってきて当方の娘と結婚させるという話が付随するのも通例である。

この説話ではテナントムワンは何よりも良き家長、賢明なる父親である。このことは I-a)のテナントムワンばかりでなく、I-b)クイキニャークの場合にも共通したもっとも大きな特徴といえよう。息子エメモットを気遣って、自ら海中のカラのもとへ殺された息子の皮膚を取り戻しに行き、その蘇生を月女に依頼するのは、何よりも父親の面目躍如である。また、さらにもっと大きな宇宙論的な所業としてカラ退治や人喰いカラの改造があり、その点でこのテナントムワンは創造神もしくは

は文化英雄であり、この説話の内容は神話的であると云えよう。ただ、テーマや構成には後述のような英雄説話と共通する特徴が濃厚でもある。

テナントムワンの創造神的な相貌が顕著な例として、多少滑稽味を帯びた説話がある。

5. 「イゲアゲウトはいかにしてアザラシと結婚したか」 [No.16] (抄訳)

テナントムワンがいたころのこと。あるとき、テナントムワンが海岸へいくと、だれかが歌っているのが聞こえた。見回すと、遠からぬところでアザラシが歌っている。「なんてすてきな歌だ。それを売ってくれないか。わたしのトナカイの群の半分をやろう」。「トナカイなんか要らないよ」。「では、わたしの娘のイゲアゲウトを嫁にやろう」。アザラシはこの申し出を受け入れ、テナントムワンの口のなかにその歌を吐き出した。

テナントムワンが家へ帰るときに、アザラシはついてきた。テナントムワンは妻のミチに「歌と引き替えに娘をやる約束をした」と云って、イゲアゲウトをアザラシに渡した。アザラシはイゲアゲウトのトナカイ皮の服を脱がせ、アザラシ皮の服を着せた。しばらくすると、アザラシは彼女を嫌い、怒るとナイフで傷つけた。

テナントムワンは昼も夜もアザラシの歌を歌っていたが、あるとき、イゲアゲウトのことを思い、「娘のところへいってくる」と云って、でかけた。

テナントムワンがやってくるのが分ると、アザラシはイゲアゲウトの舌の根元を革ひもで縛ってしゃべれないようにした。アザラシの妹は自分の身体をイゲアゲウトにこすりつけ、イゲアゲウトになりすまし、一方、アザラシ皮を着た傷だらけのイゲアゲウトは見る影もなくなっていた。

テナントムワンがアザラシの村へくると、「このアザラシのそばへいってはならない。彼女は噛みつくから」と警告された。イゲアゲウトは父親のそばへいって、自分の舌が縛られていることを知らせようとする、アザラシたちはナイフで彼女の手足を突いた。夜、イゲアゲウトは父親のところへいき、その手をとって分の口のなかへいれ、紐を解いてもらおうとしたが、テナントムワンは大声をだしたので、アザラシたちが起きてきてイゲアゲウトを棒で叩いた。

翌朝、テナントムワンは家へ帰り、家族に「アザラシのところには手足が切り傷だらけの女がいて、噛みつくらしい。わたしも片手を噛まれそうになった」と話した。エメムクットはそれはイゲアゲウトではないかと訝り、翌朝、トナカイを櫓につけて、アザラシたちのところへ行った。彼らはすぐさま、「この女は人間を喰う。人を襲わせないように、殴

っているのだ」と話した。夜に、イゲアゲウトは兄のところへきて、その手を取り自分の口のなかに入れた。彼は舌の根元が革ひもで縛られていることに気づき、それを解いた。それから、彼女はそこで虐められていることを語った。

翌朝、エメモクットが帰り支度をして、トナカイに鞭を当てた瞬間、イゲアゲウトはその櫓に飛びのって、家へ帰った。エメモクットは父親に「どうやら、あなたは耄碌しているようだ。歌のために娘を捨て、会っても彼女が虐待されていることを見抜けなかった」と云った。

テナントムワンはアザラシを怒り、海の水を隠した。海底は干上がり、アザラシたちは死にかかった。イゲアゲウトを虐めたアザラシが死ぬと、テナントムワンは水を戻したので、他の海の動物たちは生き返った。それから、イゲアゲウトは父親といっしょに暮らした。おしまい。[語り手：Chaibuga川のキャンプ、トナカイコリャクの女性、1901年4月]

この説話での創造神的な所業は結末のエピソードである。すなわち、テナントムワンは娘を虐待したアザラシを懲罰するために、海水を干上がらせ、目的を果たすとまたそれを海に戻したという話である。そこに到るまでのテナントムワンは、歌と引き替えに娘をアザラシの嫁にやり、しかも、自分の娘を見抜くことができないという愚行さや愚鈍さを見せる。この滑稽さは最後にアザラシを懲罰することによって帳消しになる。この説話でのもう一つ着目すべきことは、歌が個人のものであり、したがって、交換できるという点で、この民族誌的事実は他のいくつかの民族にも共通して認められる。それは、現代風に言えば、歌の著作権に当たるであろうが、娘と交換するほど高い価値を与えられていたとみなすなら、たいへんに興味ある貴重な情報である。

滑稽譚という観点からは2話を挙げることができる。

#### 6. 『わが腹を色塗る者』はいかにしてカラウを殺したか [No.30]

テナントムワンがいたころのこと。その息子のエメモクットが新しいカンジキをつくり、「これを試してくる」と云って、出かけた。そこでカラが櫓の滑木を斧で削っているのに出会った。「やあ、客がきたな。」「そうだ、客だ。」「向こうを見ろ、誰かトナカイでやってくる。」「どこだ」と云って、エメモクットが振り返ると、カラはその頭を殴って殺し、家へ引きずって帰り、家族とともにエメモクットを喰ってしまった。

テナントムワンは下の息子の太ひかりに「兄さんはあまりに長く帰らないから、捜してこい」と云った。太ひかりもエメモクットと同じように殺されて、喰われてしまった。

次に、テナントムワンはイッラに「従兄弟を捜してくれ」と云った。イッラも同じカラに出会い、同じように振り向いて、殺され、喰われてしまった。

最後にテナントムワンは一番上の息子の「わが腹を色塗る者」に探しに行くようにと云う。「父さんはなんて、せっかちなんだ。わが腹をたて、よこに色を塗りおわるまで待ってください」と応える。しばらくすると、彼は、カンジキの代わりに一对の丸木舟をはいて出かけた。彼はカラのいるところへやってきた。「やあ、客がきた。」「おまえの客ではない。兄弟を捜しにきたのだ。彼らを殺したのはおまえだな。」「向こうを見ろ。誰かトナカイでやってくる。」「誰が、くるものか。独りできたのだ」と云って、「わが腹を色塗る者」はカラの斧を取り上げ、それでカラを殺し、引きずって行って、カラの地下式の家に放り込んだ。それから、兄弟たちの血がまだ残っているところへいき、それを足で蹴飛ばすと、彼らは生き返った。「なんというへなちょこだ。カラの斧を奪って、奴を殺すことはできなかったのか、わたしがやったように?」と云った。

彼らは家へ帰り、元のように暮らした。そして、カラウはもう襲ってこなかった。おしまい。[語り手：Topolovka川のキャンプ、トナカイコリャクの女性、1901年]

この場合にもテナントムワンは帰りの遅い息子の安否を気遣う典型的な父親として語られる。話の滑稽さは三人の息子の迂闊さ、同じ場面のくり返しに加えて「わが腹に色塗る者」という奇抜な存在にあり、さらに、その偏屈さと3人の兄弟を救出するという健常さとの対照性にあると云えよう。

奇抜な着想は食糧難の解決にかかわる次の説話にもみられる。

#### 7. 「テナントムワンはいかにして飢饉のときに人々を救ったか」 [No.42]

テナントムワンがいたころのこと。息子たちは家畜トナカイを連れて、野生トナカイの狩りにいった。テナントムワンは漁がうまくいかず、家族には食物がなかった。とうとう、彼は妻と娘たちに、「ここから移ろう、ここには飢死にしてしまう。服とテントだけで余分なものは何も持たずにいこう」と云い、旅行用の袋を背負うと、テナントムワンは妻と娘に「さあ、それぞれ自分の肛門のなかに頭を入れなさい」と云った。テナントムワンと娘たちはそのとおりにして、それぞれが自分のなかで生きることになった。妻のミチは別のところへ入ったので、肛門に入りなおした。彼らは長い間こうしていた。

エメムクットと兄弟たちが狩りから帰り、たくさんの野生トナカイを仕とめ、テナント

ムワンの家畜トナカイの群をつれてきた。しかし、地下式の家からは誰も迎えに出てこないで、エメムクットは「見てこよう、みんな死んでしまったようだ」と云って、入ってみると、みんな旅行袋を背負い、頭を肛門に突っ込んで、丸まっていた。エメムクットがつつくと、みんなは頭を出したが、かれらは自分の腸のなかの糞をたべていたのだ。エメムクットがつばを吐いて、「糞を食べていたのか」と云うと、テナントムワンは「そうしなければ、とっくの昔に飢え死にしていた」と云った。

それから、彼らは野生トナカイの肉を食べ、家畜トナカイを屠り、美味しいものを食べて暮らした。おしまい[語り手：Topolovka 川キャンプのトナカイコリャクの女性、1901年]。

これもまた奇想天外な話である。テナントムワンは家畜トナカイを所有しているが、息子たちがそれを放牧に連れ出す。その間は海で漁をして生活することになるが、不漁のゆえに、飢えを凌ぐため家族はそれぞれの体内に入って過ごす。明らかにこの行為は人間的ではなくワタリガラスの習性のように思われる。しかしながら、説話ではそのことに触れられていない。要点は飢餓に瀕して極限的な策を見出した家長としてのテナントムワンの救済使命にあるのであろうか。

上記7話を基にテナントムワンがどのような性格の存在であるかを整理しておこう。まず、1) 吹雪を止め、また、邪悪な虐待者を罰するために海水を干すという超越者の所業からは創造神としての特徴が窺える。2) カラウを退治して病気の原因を取り除いたり、カラウ一族の人喰いの食性を改造するなど、カラウに体现される悪を排除する文化英雄でもある。3) どの説話でも話は常にテナントムワンとその家族にかかわっており、テナントムワンは息子や娘を気遣い、殺された息子の皮膚を取り戻すなど、家族を深く思いやる叡智に長けた慈父である。4) 食糧難や飢餓を回避するための方策を講ずるのは文化英雄の役割であるが、テナントムワンの責任は対象が家族だけ限られているようで、それを果たすのに手段を選ばない。説話がどこか滑稽味を帯びてくるのはそのためである。このように考えるなら、テナントムワンは創造神、文化英雄的な特徴を留めてはいるものの、コリャクという「民族」もしくは「エスニックグループ」にとっての超越的存在というよりは、「家族」の善良なる長としての役割が強調された存在であるように思われる。このことは、I-a)の11話中残りの4話で一層明かにみられ、テナントムワンは主人公であるよりは脇役、しかも重要な脇役である。そして、この4話は上に挙げた7話とは異なり、全体として英雄説話の特徴を帯びている。



I-a-2) 英雄説話のなかのテナントムワン

8. 「エメモクットはいかにして太陽男の娘と結婚したか」 [No.21]

①テナントムワンがいたころのこと。エメモクットという名の息子が生まれたが、テナントムワンは彼を醜い、びっこの、みすぼらしく汚い姿にし、トナカイ皮ではなく、貧しい人たちのようにアザラシ皮を着せ、人の笑いものにした。

②夏のあるとき、トナカイびとが海へやってきて、エメモクットを見た1人、「妬みや」が、「おまえは太陽男の娘を得ることはできまいな」と云った。エメモクットは家へ走り帰り、「行くことはできるが、帰ってくる道はないという太陽男の娘」のことを悲しげに父親に訴えた。テナントムワンは「行きたいなら、イゲアゲウトに相談するがよい」と云った。イゲアゲウトはチャナイガウトといっしょに、高い木の上に小屋を造って住んでいた。

③エメモクットは姉妹のところへ出かけ、木に登りはじめた。木が揺れるので様子をみに出たチャナイガウトが、「なにか化け物のようなものがきた」と云うと、イゲアゲウトはシヤマンであったので、誰がきたのかを察知した。彼女は裁縫板をもって出てゆくと、それで兄の額を打った。彼は気絶して、地面に倒れた。エメモクットは2つに割れて、なかから立派な服を着た、本当の美しく聡明なエメモクットが顕れた。イゲアゲウトが「何用できたのか」と訊くと、「太陽男の娘のところへいきたい」と答えた。

④イゲアゲウトは兄に2匹の鉄のハツカネズミ、鉄の櫓と鉄のサケを与え、『妬みや』を連れていきなさい。路を知っているはずだ」と云った。「妬みや」はいやがったが、エメモクットが「来なければだめだ。人を笑い者にしなくなるために」と云ったので、彼はいっしょに出かけた。彼らはまもなく火の海に着いた。火炎の波が岩だらけの岸をなめ、人間の骨を打ち上げていた。エメモクットと「妬みや」は鉄のサケのなかに入って、海に出た。まもなく、対岸に着き、歩いていくと火の山があり、全体が燃えていた。そこで、鉄の櫓にのり、鉄のハツカネズミに曳かせて山を越え、太陽男のキャンプに到達した。キャンプでは誰かが、「初めての客だ。これまで、この場所にたどり着いた客はいない。迎えて、ボールゲームをやろう」と云った。エメモクットと「妬みや」は太陽のキャンプの人びととボールゲームをやり、エメモクットはみなを負かした。

⑤キャンプへ行って、太陽男のテントへ入ると、「何用できたか。だれもわれわれのところへ訪ねてきたものはいなかった」と云う。エメモクットが太陽男の娘を嫁にするためにきたことを告げると、太陽男は「わたしには娘はいない」と云った。「けっこうだ。しばらく、

居させてもらって、あなたに仕えよう。人は太陽男に娘がいないのに、いるとは云わないだろう」と云って、エメムクットはそこで働いた。あるとき、夜に太陽男の下の息子がエメムクットを起こして、こう云った。「起きなさい。肉や脂身を調理するあの石テーブルの下に母は姉を隠した」。エメムクットが起きて、そこから娘を取り出したとたん、母親が目を覚まし、娘を取り上げると、自分の編んだ髪の毛の下にしまって、再び寝てしまった。エメムクットも寝たが、またしても、弟が起こしにきて、「母の三つ編みの髪の下にいる。取ってきなさい」と告げた。エメムクットが起きて、娘を取ったが、母親が目を覚まして、彼女を連れ去り、自分の腕輪のなかに隠した。エメムクットは寝たが、弟がまたしても起こしにきた。そして、彼は太陽男の娘を得て、結婚して、そこで暮らした。「妬みや」も太陽男の別の娘と結婚した。

⑥エメムクットと「妬みや」は嫁たちと太陽男の息子をつれて家に帰ってきた。途中には火炎の海も火の山もなかった。家のそばまでくると、イッラが「エメムクットが帰ってきた」と大声で云ったが、テナントムワンはそれを信じなかった。ミチは燃えさしをもって出迎え、テナントムワンはたくさんのトナカイを屠り、地面から犬繋ぎの杭を引き抜いた。すると、トナカイの一群が地中から出てきた。

⑦テナントムワンはイゲアゲウトを太陽男の息子と結婚させた。こうして、みなは平穩に暮らした。冬が近づくと彼らは太陽男のキャンプへいき、夏に向かってテナントムワンの村へ戻ってきた〔語り手： Kilimadja 川のキャンプ、トナカイコリャクの女性、1901年〕。

この説話が実際にはどのように語られたかについて知る手がかりはないが、テーマ、構成、内容は明らかにこれまでの説話とは異なっている。これを英雄説話とみる根拠は、なによりもこれが主人公エメムクットの花嫁獲得の遠征譚であるからである。さらに、①エメムクットの異形（異常出生ではないが、誕生から異形を付されている）、②エメムクットの死と再生（呪的な力をもつ裁縫板で割られて、真姿を顕す）、③太陽男の娘への求婚のための遠征と困難（火炎の海と山）の克服、④鉄のサケ、櫓、ハツカネズミ、牽き綱（英雄説話もしくは叙事詩に共通する鉄文化要素）、⑤シャマンである姉妹（イゲアゲウト）の庇護と助力（ただし、ヒロインとしての姉妹の役割は認められない）、⑥求婚難題としてのボールゲーム（ただし、ボールゲームはコリャクの説話では頻出するので、特別ではないかも知れない）、⑦母親からの試練（太陽男の娘は母親によってさまざまな箇所へ隠される。花嫁が微細なものに変えられて庇護されるというモチーフはアイヌを含めいくつかの民族の英雄説話や叙事詩にもみられる。）⑧嫁と太陽男の息子を伴っての帰郷。これに⑨テナントム

ワンの超越性（トナカイの地面からの出現）が付加されているが、最後の太陽男の一族との季節的な交流などはコリャクの説話の一般的な結末である。

英雄説話と想定できる説話では基本的なテーマや構成が類似していると云ってよからう。「イゲアゲウトと雲びと」[No.4]では、行方不明になったイゲアゲウトを兄のエメモクットが捜し求め、ついに天上の雲びとのむらへ到って、雲びとの男の嫁となっているのを見つけるが、絶えずもの大きさが膨張したり収縮するその世界にいることを好ましく思わない父親のテナントムワンが娘を地上に取り戻す。「エメモクットとムシ男」[No.11]では、エメモクットの妻である草女がムシ男に掠奪されたのを知り、やはり、父親のテナントムワンの与えてくれた鉄の舟、ハツカネズミ、櫓と牽綱、さらにアリびとの援助によって妻とその他の犠牲者たちを救出する。また、「エメモクットと太陽男の娘」[No.12]では、テーマは異なり、エメモクットの敵対者は邪悪な他者ではなく、彼を妬む従兄弟のイッラであり、その奸計によって地下世界に墜落したエメモクットがそこでカビに被われた太陽男の娘と結婚し、同じように落ちてきた妻たちとともにベニテングダケとなって地上に復活し、イッラに復讐するまでが語られる。

本稿の課題はコリャクの神話では大ワタリガラスがもっとも重要な存在であって、すべての説話がこれに収斂されるとするヨヘルソンなどによって継承されてきた通説を検討することにある。これまでにみてきたところから結論するとすれば、説話のなかのひとつの主体であるテナントムワンは、1) ヨヘルソンが「創造神」と訳語をつけているが、その特徴は必ずしも顕著ではないし、また、2) ワタリガラスの外衣を着ることによって変身する場合があるが (No.13,22)、本質的には人格的な存在であって、大ワタリガラスと同定することはできない。1) はコリャクの創世神話がチュクチやイテリメンのそれに比べ、あまり明確でないこととも関連していよう。さらに、テナントムワンの説話には英雄説話と分類できる一群があり、ジャンルとして多様性をもっていることが推測される。

ここで試みたような作業をつづけることによって、コリャクの「大ワタリガラス」神話の本質がどのように成り立ってきたのかを明かにすることができるものと思う。

---

註1)ユーラシア側関連の JESUP 刊行書には以下のものがある。

Jochelson, W.

1908      *The Koryak, The Jesup North Pacific Expedition, Memoir of the American Museum of Natural*

*History 6, Leiden-New York*

1926 The Yukaghir and the Yukaghirized Tungus, *The Jesup North Pacific Expedition, Memoir of the American Museum of Natural History 9, Leiden-New York*

1961 (D.Worth) *Kamchadal Texts collected by Jochelson, Mouton*

Bogoraz, W.

1902 "The Folklore of Northeastern Asia, as compared with that of Northwestern America", *American Anthropologist, New Series, Vol.4, No.4*

1904-1909 The Chukchee, *The Jesup North Pacific Expedition 7, Memoir of the American Museum of Natural History, Leiden-New York*

1910 Chukchee Mythology, *The Jesup North Pacific Expedition, Memoir of the American Museum of Natural History 8, Leiden-New York*

Laufer, B.

1902 The Decorative Art of the Amur Tribes, *The Jesup North Pacific Expedition 4, Memoir of the American Museum of Natural History, Leiden- New York*

注2) チュクチの口承文芸には、W.Bogoraz によると、a)「創造のはじめの物語」、b)「本当の昔話」、c)「反目の時代の物語」の区分がある。a)には宇宙開闢、世界の創造、日月星辰、人間や動物、特に、トナカイの起源、人間の増殖についての説話があり、b)にはシャマンの手柄やケレ（悪霊）との闘いの物語、世間話が含まれる。そして、c)はチュクチと異民族との抗争に関する伝承であり、敵対する異民族は、タンギット（コリャク、チュヴァン、ロシア人）とアイヴァナト（アジアとアメリカ大陸のエスキモー）である [Bogoraz 1900: iv-v; 荻原 1995 : 8]。

注3) ヨヘルソンの原文での表記は以下のようである。: Tenanto'mwan, Quikinnra'qu, Ačičenra'qu.

注4) kalau(単数は kala)、パレン地域では kalak、kamak とも呼ばれ、トナカイコリャクではまた別の名称もある。基本的には悪しき霊的存在であるが、説話にみられるようにその性格は多彩である。

## 文献

Bogoraz, Waldemar

1903 "The Folklore of Northeastern Asia, as compared with that of Northwestern America",  
*American Anthropologist, New Series, Vol.4, No.4, 577-683*

1904-1909 The Chukchee, *The Jesup North Pacific Expedition, Memoir of the American Museum of*

- Natural History*, Vol.VII, Leiden-New York
- 1910 Chukchee Mythology, *The Jesup North Pacific Expedition, Memoir of the American Museum of Natural History*, Vol.VIII, Leiden-New York
- Charrin, Anne-Victoire
- 1983 *Le petit monde du Grand Corbeau, Recits du Grand Nord siberien*, puf
- Chowning, Ann
- 1962 Raven Myths in Norhtwestern North America and Northeastern Asia, *Arctic Anthropology*, Vol.1, No.1, 1-5
- Jochelson, Waldemar
- 1909 The Koryak, *The Jesup North Pacific Expedition, Memoir of the American Museum of Natural History*, Vol.VI, Leiden-New York
- 1927 The Yukaghir and the Yukaghirized Tungus, *The Jesup North Pacific Expedition, Memoir of the American Museum of Natural History*, Vol.IX. Leiden-New York
- Worth, D.
- 1961 *Kamchadal Texts collected by Jochelson*, Mouton
- Богораз, В.Г.
- 1900 *Материалы по изучению чукотского языка и фольклора, собранные в колымском округе В.Г.Богоразом, Труды якутской Экспедиции, снаряженной насредства И.М.Сибирякова, Отдел III. Том X. Часть III. СПб*
- 1926 Миф об умирающем и воскресающем звере, *Художественный фольклор*, № 1
- 1936 "Основные типы фольклора северной Евразии и Северной Америки" , *Советский Фольклор*, № 4-5
- Володин, А.П.
- 1974 *Ительменский язык*, АН Институт языкознания, Лен. отделение
- Мелетинский, Е.М.
- 1974 *Поэтика мифа*, Институт мировой литературы им. А.М. Горького. Москва
- 1979 *Палеоазиатский мифологический эпос - цикл ворона*, Главная редакция восточной литературы. Москва

Меновщиков, Г.А.

1975 *Сказки и мифы народов Чукотки и Камчатки*, Главная редакция восточной литературы.  
Москва

Стебницкий, С.Н. (未見)

1941 *Корякский исторический фольклор и зарождающаяся литература* (рукопись)

2000 *Очерк этнографии коряков*

荻原真子

1990 「北東パレオアジア諸族の創世神話—その問題点—」(小谷凱宣編)『北方諸文化に関する比較研究』(名古屋大学教養部)、105-121

1995 『北東アジアの神話・伝説』、東方書店

(おぎはら しんこ・千葉大学文学部)